

Originality and good luck

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9358

独 創 性 と 運

Originality and good luck

慶應大学医学部病理学 (前金沢大学がん研究所)

岡 田 保 典

何気なくテレビを見ていたら、アラーキーこと写真家の荒木経惟さんの写真家としての生活を紹介していました。テレビや週刊誌で知る彼の行動や発言は、過激で奇怪かつエロチックなことが多く、あまり私の趣味に合うものではありませんでした。彼に対する一般的な評価も、卑猥で軽薄な写真家というのが多いのではないのでしょうか。しかし、最近彼の作風を高く評価する人が国内外で増え、着実にその人気を得ているようです。今回のテレビ番組はNHK教育放送ということもあり、写真家としての姿勢とウィーンでの展覧会の成功の報道を通して、彼のフィロソフィーや表現の大胆さ、さらには発想の新鮮さに感心させられました。多くの写真家のように立派なカメラをもって厳かで哲学的な風貌をしているわけでもなく、いやむしろやはり軽薄でエロおやじの顔つきと活動的な姿に私はいたく感心してその番組を楽しみました。

翻って医学や科学の世界ではどうでしょうか。彼のような人はあまりいないでしょうが、個性的だ、変わっている、奇妙だ、超アグレッシブだとか、言われる人は多くいます。ことに個性の強いアメリカの学者では、しばしば見受けられるように思います。彼らと毎日付き合うのは正直なところ少し疲れますが、私はそのような人に憧れと畏敬の念を抱いている者の一人です。彼らの多くは凡人では考え及ばない着想をもち、強力なエネルギーで研究を進めます。その迫力ある発表に、私のような凡人は違和感があっても感心してしまいますが、それに真っ向から激突するさらに凄い奴がかならずいます。Big journalといわれるCell, Nature, Scienceなどの雑誌に発表される論文では、どうもこのタイプの人によって成し遂げられた仕事は特に凄いものが多いようです(私の漠然とした印象ですが)。一体、ユニークな仕事、独創的な研究というもの、これまでの概念や常識を破るのですから、常識人からみれば、非常識、奇怪、矛盾している、疑わしい、変だ、信じられない、などと時に評価

されることは頷けます。このような仕事は、現在では遺伝子導入や欠損マウスの実験で見られることが多いようです。この分野では実験前の仮説に反したデータを得た時にこそ、素晴らしく画期的な仕事になるようです。自分の研究分野を越えて、目の前にあるテーマに果敢に立ち向かうエネルギーが必要で、そのような才能は常識人ではないの方が向いているようです。

一方、人生には運、不運が付きものです。日常生活でも事故が起きる確率はわかっていますが、それが自分におこるか他人のことかは運次第です。丁度、ロシアンレットのようなもので、飛行機事故などでよく話題になることです。ノーベル賞などの世界的な賞では、受賞者とその選にもれた人との落差の中に、運、不運が絡んだ多くの物語があります。我々の日々の研究生活でも、幸運と不運はよく経験するところです。論文を投稿した場合でも、採用あるいは不採用の決定は通常は2-3人のレビュアーによるわけですから、自分の仕事に好意をもつ関係者がレビュアーになってくれれば有利なわけですが、誰に当たるかは運任せです。レビュアーと言えば、先日面白い話を読みました。ある先生がNatureに投稿したところ、なんとその論文のレビューが自分に依頼され、採用の返事をして論文が通ったという話です(実験医学15:2144, 1997)。ウソのような話ですが、このような幸運もあるようです。人事なども運が大きな要素です。昔聞いたことがあります。教授になるための資質として『運、鈍、根、忍、健』の順で大切だといえます。まずは、幸運であることが必要ようです。研究だって、何かの弾みで突然注目され、それがブームになることはよくあります。大きなヒットは自分だけでは作られず、運が向くことが必要ようです。さて、そんな運が何時やってくるのか、その時を楽しみにして頑張ってみるしかないのが現実です。奇抜で変人と言われることを恐れることなく、常識にとらわれないユニークな研究を展開しつつ、ついでに運も呼びたいものです。